

図 トルコギキョウのフザリウム属菌接種試験における平均発病指数と立枯病耐病性の品種間差

品種	A	B	C	D	E	
接種試験での平均発病指数*1	0.7	0.8	1.6	3.1	3.9	
接種後70日後植物体の様子						
栽培圃場での萎凋・枯死株率*2	一番花収穫前	0.2%	0.6%	0.3%	0.4%	1.4%
	一番花収穫後	0.5%	1.6%	4.3%	9.6%	11.1%
耐病性	強 ← → 弱					

*1 平均発病指数が0に近いほど耐病性が強く、4に近いほど耐病性が弱いと評価することができる
*2 萎凋・枯死株率は、立枯病発生圃場の土壌を消毒後に定植した条件下での結果

現場で使える！研究成果

トルコギキョウの立枯病

耐病性の評価法確立

品種選ぶ際の指標に

県内のトルコギキョウ栽培では、フザリウム属菌による立枯病が問題となっている。作付け前に本病に対する耐病性を有する品種を選定できれば、生産者にとって品種選択の重要な指標となるが、これまで本県では耐病性評価法が確立されていなかった。

そこで、評価する際の栽培条件を年次が違って

県内のトルコギキョウ栽培では、フザリウム属菌による立枯病が問題となっている。作付け前に本病に対する耐病性を有する品種を選定できれば、生産者にとって品種選択の重要な指標となるが、これまで本県では耐病性評価法が確立されていなかった。

そこで、評価する際の栽培条件を年次が違って

に、この結果が圃場条件で再現されるかを検証するため、27品種から発病程度の異なる5品種を選び、土壌消毒後の本病発生圃場に定植した。

その結果、一番花収穫までは発病程度に大きな差はなかったが、一番花収穫後には品種間で発病程度の差異が明確となり、接種試験の結果と同様の傾向が確認された。このことから、確立した耐病性評価法は品種の耐病性を評価する手法として有効であることが明らかとなった。

今後、新たな品種を導入する場合において、本手法を利用して耐病性の程度を事前に評価することにより、被書リスクを低減するための品種選定に有益な情報を得ることができると期待される。

(県農林技術開発センター 農産園芸研究部門 木戸真史)